



JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE

設立 1932年 日本学術振興会

## 理事長就任ごあいさつ

日本学術振興会は、天皇陛下の御下賜金をもとに昭和7年（1932年）に創設されました。その活動は、学術研究の助成、研究者の養成、学術に関する国際交流の促進、大学改革や大学のグローバル化の支援など多岐にわたり、学術の振興を図ることを目的とする我が国唯一の独立した資金配分機関（ファンディング・エージェンシー）として、研究者の活動を安定的・継続的に支えてきました。

### ～学術は未来を拓く原動力～

学術研究は人類の知のフロンティアを開拓する営みです。さまざまな学問分野の研究によって創出され体系化された知は、人類文化の重要な資産として次世代に引き継がれるとともに新たな挑戦課題を提示します。たゆまざる学術研究のなかから、人類の福祉や地球規模の課題解決に資する新技術、社会を変革する新概念などが生み出されてきた歴史は、このような「知の循環」の重要性を教えています。研究者の自由な発想に基づく学術研究による知の創出はイノベーションの源泉であり、国や社会を発展させて未来を拓く原動力です。

人文学、社会科学から自然科学までのあらゆる学問分野にわたって、研究者の自由な発想に基づく独創的・先駆的な研究を厳選して支援する仕組みが科研費（科学研究費助成事業）です。現在、応募者がより広い視野で自らの研究を位置付け、審査委員がより多角的な視点から審査することを通じて、競争的な環境で優れた研究課題を見いだすことができるよう抜本的な科研費改革を進めています。科研費は、学術研究を担う研究者が、応募者となり、また審査委員ともなり、研究者全員で作上げ、支えるものです。日本学術振興会は、研究現場からの声を聴いて改善に取り組みながら、科研費のさらなる充実に努めてまいります。

### ～研究者一人ひとりの挑戦を総合的に支える～

研究者の自由な発想に基づく学術研究は、社会的要請や政策的戦略に基づく研究を含むあらゆる研究活動を担うべき研究人材の養成の場でもあります。しかしながら近年の厳しい国家財政のもとで、大学等の運営の基盤となる予算の削減が続き、その影響は教育研究職ポストの減少という形で顕著に現れています。特に若手研究者の多くは、プロジェクト資金等で雇用される短期のポストを渡り歩かざるを得ない状況に置かれています。そのような短期的ポストさえ望めないという分野も



あります。このような状況が、次の世代の若者をして研究者を志すことを躊躇させているという深刻な事態が現実起こっています。

希望をもって研究者として育つ道筋が不透明になっている現状は、大学に身を置いていた者として、極めて深刻な危機感を覚えます。日本学術振興会としては、そのような現状を踏まえ、人文学、社会科学から自然科学までのあらゆる分野にわたって、特別研究員事業をはじめ、知の創造に果敢に挑戦する研究者の活動を総合的に支援することにより、優秀な研究者がその実力を遺憾なく発揮できるような創造的環境の実現に向けた取り組みを推進してまいります。

### ～国際的研究ネットワークを強化し、好循環をつくる～

情報通信技術の飛躍的な進歩などによるグローバル化は学術研究のあり方にも大きな影響を及ぼしています。研究者にとっては国内外の区別なく活躍する機会が増える一方、卓越した知と人材を求める国際競争が激化しています。こうした潮流の中で我が国の研究者が世界の学術研究をリードしていくには、それぞれが常に世界レベルの研究ネットワークの中に身を置き、国際的な頭脳循環の中で切磋琢磨し続けることが鍵となります。こうした国際的活動を通じて、我が国の研究者・研究機関が世界からよりヴィジブルになり、世界の優秀な研究者を引きつけ、卓越した知を生み出す国際的研究ネットワークが強固になる好循環をつくり出すことが、我が国の将来にとって重要です。日本学術振興会は、諸外国のファンディング・エージェンシーや研究者コミュニティなどと連携して各種事業を推進することにより、そのような好循環の促進を目指します。

世界をリードする学術研究は、研究者一人ひとりの既存の枠にとらわれない自由な発想と、実現不可能と思われるような果敢な挑戦によるものです。そして、学術研究による知の創出は、研究者のたゆまざる努力の結晶です。日本学術振興会は、人文学、社会科学から自然科学までのあらゆる分野にわたり、こうした知の開拓に果敢に挑戦する研究者をしっかりと総合的に支えたいと考えており、皆様方の一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。就任のごあいさつといたします。

平成30年 4月 里見 進

